

原爆をつくり出したことによつて、自らを滅亡の深淵におとし入れた人類は、この滅亡をまぬかれようとして、苦悩をつづけている。

しかし平和は、生存の欲望をもつて、招きよせることが出来るのであろうか。

平和の実現は、真理の認識から始まらねばならない。

原爆は、人類が、その全史を通じて、造りつづけてきた罪業の結晶である。

われわれは、自らつくり出した罪の報いをまぬかれようとするのではなくて、既に、その報いを引き受けて、なくなつた人人の現実には、思いをいたさなければならぬ。

その現実の只中に、清浄な願いが光っているではないか。

平和は、彼の岸からくる。

生の欲望ではなくて、死の事実から、建てられてくる平和の願い、それが悲願である。

この鐘の正面に刻まれた「悲願」の二字（前広島市長浜井信三筆）が、この鐘の名である。

悲願の鐘には、平和の象徴として、全面に、**国境のない世界地図**が描かれている。

闘争は、境から始まる。

国と国。人と人。すべて境は、自分の生と、自分の死との、境の反映である。

この境のある限り、平和はない。

この境のとれたところにだけ、平和は実存する。

従つて、この鐘は、「**自己を知れ**」の一語に、その悲願を結晶した。

西哲ソクラテスを生み出した、このデルフオイの神勅が、ギリシヤ語（駐日ギリシヤ大使アレクシス・レアティス筆）と日本語（日本教育会長・前広島大学長森戸辰男筆）をもつて記された。

自己を知ることが、平和を現実とする唯一つの道であることを表わして、赤道と